

恵解山古墳

第7次調査概報

2007

長岡京市教育委員会

編集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

はじめに

恵解山古墳は、5世紀前半に築造された乙訓地域最大規模の前方後円墳で、前方部から700点以上の鉄製武器類を納めた副葬品埋納施設が発見され、全国的にも貴重な古墳であるとして国史跡に指定されました。

本市ではこの優れた文化遺産を将来にわたって守り伝えてゆくとともに市民に広く開放し活用を図るため、平成15年度に保存整備基本構想を、平成17年度には保存整備や活用の指針となる基本計画の策定を行いました。基本計画の決定を受け、平成18年度からは事業の具体化に向けた保存・整備委員会を立ち上げ、さまざまな角度から検討を行っているところです。また、市民との協働を基本とするため、「恵解山古墳を愛する人」を募集し、今後の古墳活用にあたって核となる組織に育成していきたいと考えています。

さて、今年度に国庫補助事業として実施した第7次調査は、恵解山古墳の保存整備に伴う発掘調査の初年度となります。本書は、この発掘調査成果の概要をまとめたものであり、恵解山古墳に対する理解を深めるとともに、郷土の歴史学習の資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご指導をいただきました諸先生方、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関、ご協力いただきました近隣の皆様方に紙面をお借りして深く感謝いたします。

平成19年3月

長岡京市教育委員会

教育長 芦田 富男

例言

目次

1. 本書は、平成18年度に国庫補助事業として実施した恵解山古墳第7次（長岡京跡右京第893次）調査の概要報告である。	1 位置と環境 …………… 3
2. 発掘調査は、平成18年12月1日から平成19年3月5日まで行い、調査面積は231m ² であった。	2 過去の調査 …………… 4
3. 調査は、長岡京市教育委員会から委託を受けた（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。	3 第7次調査の成果 …………… 7
4. 表紙の写真は、7-4調査区の全景である。	(1) 7-1調査区 …………… 7
5. 本書の編集と執筆は、埋蔵文化財センターの山本輝雄が行った。	(2) 7-2調査区 …………… 8
	(3) 7-3調査区 …………… 10
	(4) 7-4調査区 …………… 11
	(5) 7-5調査区 …………… 12
	(6) 出土遺物 …………… 13
	4 まとめ …………… 14



1. 南東上空から見た恵解山古墳

1 位置と環境

恵解山古墳は、J R 京都線の長岡京駅から南方に約 1 km、京都府長岡京市の南部地域にあたる勝竜寺1206他から久貝二丁目813他にかけて所在している。古墳時代中期（5世紀前半）に築造された墳丘長が約128mほどに復元できる前方後円墳で、桂川右岸流域に分布する数ある古墳の中では最大級の規模を誇っている。古墳は、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する低位段丘の末端付近に前方部を南東に向けて築造されている。標高にして約16m前後とかなり低地に立地していることになるが、桂川、宇治川、木津川の三河川が合流して淀川に注ぐ地点に近いことから、交通の要衝を意識して造られたものではないかと推察することができる。

古墳のすぐ南東部の調査（右京第37次調査）では、一辺17×14mの方墳である南栗ヶ塚古墳が発掘され、周溝から円筒や朝顔、家形などの埴輪が出土している。また、南西部すぐの調査（右京第812次調査）では、大きな落ち込みが確認され、その内部に堆積した整地層から埴輪片がまともに出てきたことから、付近に古墳の存在した可能性が推察されている。このようにみると、前方部の前面に近接して埴輪を伴う古墳が複数存在していることは間違いなさそうである。これらの埋没古墳は、主墳としての恵解山古墳に従属する陪塚の可能性が考えられるだけに、重要であろう。



2. 恵解山古墳の位置 (1/5000)

2 過去の調査

恵解山古墳に関する調査は、古く大正13年の梅原末治氏による踏査にまで遡り、次いで昭和42年に京都府教育委員会が墳丘の測量調査を行い、その後昭和50年代になってようやく発掘調査が開始されるようになった。発掘調査は、その原因によって第3次調査までと第4次調査以降とに大別することができる。

まず、第1次～3次調査は、土木工事など開発行為に伴って実施された調査である。特に昭和55年に実施された第3次調査では、前方部で副葬品の埋納施設が確認され、多量の鉄製武器類が出土したのをはじめ、西側くびれ部で遺存状況の良好な葺石が確認されるなど多大な成果が得られた。そして、この調査の翌年に国の史跡として指定され、後世に保存されることが決定した。

一方、第4次以降の調査は、史跡指定地の用地購入が完了したことに伴い、保存整備を行うための基礎的な情報を得るために行われたものである。まず第4次調査では、前方部の幅が大きくなることが判明し、また第5次調査では墳丘西側に造り出しの存在が確認されるとともに、前方部西側面で埴輪列が検出されるなど新たな知見が得られた。さらに、第6次調査では、造り出しの規模が明らかになったことに加え、西側くびれ部基底の位置なども確認され、古墳の形態や規模などを復元する上での貴重なデータが蓄積されつつあった。

3. 恵解山古墳の調査一覧表

調査 回数	長岡京跡 調査回数	調査期間	調査 面積	調査主体	調査の内容	文献
		1924年		京都府	梅原末次氏による古墳の踏査。 墳形と規模、葺石と埴輪を伴うこと、埋葬施設が堅穴式石室であることなどを紹介。	京都府史蹟勝地調査会 報告第6冊（1925年）
		1967年		京都府教育委員会	分布調査に伴う墳丘の測量。	埋蔵文化財発掘調査概 報1968（1968年）
第1次		1975年3月10日 ～1975年3月19日		長岡京市教育委員会	市道敷設工事に伴う調査。	長岡京市文化財調査報 告書第2冊（1976年）
第2次		1976年11月26日 ～1977年1月11日		長岡京市教育委員会	中学校グラウンド造成工事に伴う調査。 後円部および前方部の基底付近の葺石を確認。	長岡京市文化財調査報 告書第3冊（1977年）
第3次		1980年4月15日 ～1980年7月15日	313㎡	長岡京市教育委員会	墓地拡張工事に伴う調査。 前方部中央の副葬品埋納施設、墳丘西側く びれ部の葺石を確認。 埋納施設から、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、蔵手刀 子などの鉄製品が大量に出土した他、管玉 や結晶片岩、安山岩なども出土。	長岡京市文化財調査報 告書第8冊（1980年）
第4次	右京 第783次	2003年8月11日 ～2003年11月10日	179㎡	（助）長岡京市埋蔵文化 財センター	範囲確認調査。 前方部前面の葺石、周壕を確認し、前方部 幅が大きくなることが判明。	長岡京市文化財調査報 告書第46冊（2004年）
第5次	右京 第827次	2004年9月1日 ～2004年10月28日	218㎡	（助）長岡京市埋蔵文化 財センター	範囲確認調査。 前方部西側面の埴輪列と造り出しの存在が 新たに確認されたとともに、前方部南西隅 を検出。	長岡京市文化財調査報 告書第47冊（2005年）
第6次	右京 第859次	2005年9月20日 ～2005年11月9日	142㎡	（助）長岡京市埋蔵文化 財センター	範囲確認調査。 墳丘西側のくびれ部と造り出し、後円部の 葺石などを確認。造り出しの規模が判明。	長岡京市文化財調査報 告書第48冊（2006年）
第7次	右京 第893次	2006年12月1日 ～2007年3月5日	231㎡	（助）長岡京市埋蔵文化 財センター	保存整備に伴う調査。 前方部東側面の葺石と平坦面、西側裾部の 葺石などを確認。	長岡京市文化財調査報 告書第50冊（2007年）



4. 第3次調査



7. 第5次調査 (5-1 調査区)



5. 第4次調査 (4-1 調査区)



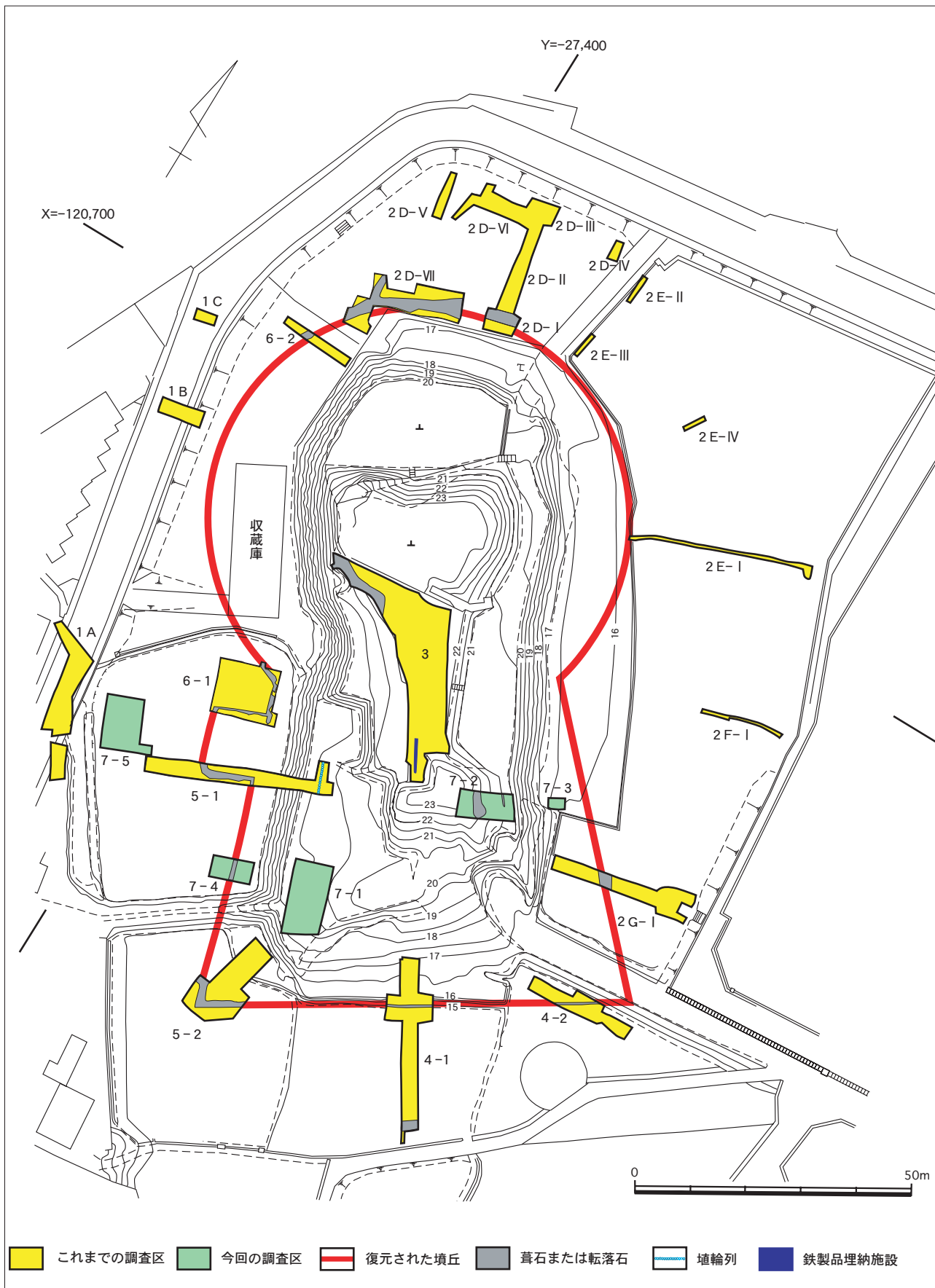
8. 第5次調査 (5-2 調査区)



6. 第4次調査 (4-2 調査区)



9. 第6次調査 (6-1 調査区)



10. 墳丘と調査区の配置 (1/1000)

3 第7次調査の成果

(1) 7-1 調査区

第5次調査（5-1 調査区）で確認された埴輪列の延長部分を追究する目的で設定した。この場所は、前方部の南西部にあたる平坦面であつて、かつては畑地として、現在は栗林に利用されていた。調査の結果、検出が予測された平坦面（テラス）と埴輪列はすでに削平を受けて存在せず、墳丘の盛土面とそこに営まれた近世以降の土葬墓群を確認したのみである。

墳丘と盛土 本調査区では、墳丘の構築方法を知る興味深い手がかりが得られた。盛土は、調査区の東西で様相が異なっており、まず東部では赤褐色系を呈した粘質土および礫混じり土を交互に積んでいる状況を確認した。それらは、比較的大きな単位で、おおむね水平に施されているようである。これに対して、その外側にあたる西部では細かい単位の盛土で構成されており、断面ではおおむね厚さ10cm前後の凸レンズ状、平面的には径30~40cm程度の楕円形を呈した小単位がモザイク状に分布している状況を確認できた。盛土に使用された土は、赤褐色系、茶褐色系、黒色系、黄白色系など色調の異なる粘質土や礫混り土など数種類に分けることができ、そのうち黒色や黒褐色系が旧表土起源、黄白色系などは地山起源と考えられる。

土葬墓群 平坦状に削平を受けた墳丘盛土の上面で、近世以降と考えられる土葬墓を6基確認できた。土葬墓は、方形、長方形、楕円形などの平面形を呈し、人骨の遺存するものが多く、上部にいくつかの礫を据え置いて墓標とするものが1基ある。



11. 7-1 調査区の全景（北から）



12. 墳丘盛土の堆積状況1（南から）



13. 墳丘盛土の堆積状況2（北西から）

（2）7－2 調査区

第3次調査で確認された副葬品埋納施設の東南東部に設定した。この地点は、墳丘測量図によると比較的旧状をよく留めているものと考えられたため、前方部東側面の墳丘斜面と葺石の追究、それに平坦面の確認などを目的として調査を進めた。その結果、竹藪の客土や2次的に堆積した墳丘の盛土層など後世の土層によって厚く覆われており、しかも近世以降の墓地造成で破壊されていた個所があるなど、予想以上に墳丘の改変が著しかったとはいえ、前方部東側面の傾斜面とそれに連なる平坦面（テラス）を確認することができた。

ちなみに、この調査区で7－1調査と同様な近世以降の土葬墓群を検出したことは、予期せぬ成果であった。

墳丘と盛土 墳丘の傾斜面は、約28°ほどの傾斜角があり、水平距離で5.5m以上、高さになると3m以上あることを確認できた。墳丘の盛土は、暗褐色系の土に地山起源の黄白色系の土が斑粒状に混在するものを主体に用いており、比較的大きな単位でもって盛土しているようである。先述した7－1調査区における盛土の様相とは大きく異なり、場所によって使用する盛土や構築法などに違いのあることがわかる。

葺石 葺石の遺存状況は必ずしも良好とはいえないが、基底石とみられる石列と傾斜面の上部に残存する葺石を確認することができた。

まず基底石と考えられる列石は、土葬墓群を造営する際に動かされ、原位置を留めていない可



14. 7-2 調査区の全景（東から）

能性がないとはいえないが、傾斜面と平坦面とのほぼ境目に位置していること、比較的大振りの石材を横方向に用いてほぼ直線的に配していることなどから、ここでは基底石と判断しておきたい。次に傾斜面の上部に残存する葺石は、おもに拳大ほどの大きさの礫を墳丘に差し込むように小口積みしていることを確認できたが、盛土との間に裏込めなどは認められなかった。葺石に使用された石材種は、おもにチャート、砂岩、頁岩～粘板岩などであり、これらは古墳の南西約900mの地点を流れる小泉川から採取されたものと推察されている。この他、転落石の中から、結晶片岩の小片が1点ではあるが出土している。

平坦面 平坦面は、現状では幅が1.75m以上あることを確認でき、南側、すなわち前方部の前端に向かって緩やかにではあるが上昇していた。この平坦面のレベルをみると、約18.5m前後であって、第5次調査（5-1 調査区）で埴輪列が確認された墳丘西側の平坦面と標高がほぼ一致することから、同じ段の平坦面であると判断することができた。

なお、調査区内においては、埴輪列の存在を確認することはできなかった。

土葬墓群 土葬墓群は、墳丘傾斜面の下半部から平坦面にかけて営まれていた。傾斜面を階段状にカットして狭い平坦面を造成し、そこに累々と20基ほどの墓壙を隣接するように掘り込んで埋葬したもので、さらに調査区外の南北に延びている。完掘していないので、詳細は不明だが、墓壙の形態は長方形や長楕円形、円形など様々で、それらの規模も多様である。人骨の遺存している例が多く、副葬品とみられる土師器の小皿などが出土するものもあった。



15. 傾斜面の葺石出土状況（北から）



16. 基底石出土状況（南東から）

（3） 7－3 調査区

7－2 調査区の東側に設定した小面積の調査区であって、前方部の東側面における墳丘盛土や地山の状況などの確認を目的とした。

調査では、調査区の東端部が現代の溝によって破壊されていたが、竹藪の客土を除去した結果、地山とそこに積み上げられている盛土層を検出することができた。

地山は、灰白色を呈した硬質の砂礫層であり、上面の標高は15.4m前後である。盛土は、おもに地山起源の黄灰色系の粘質土などを用いており、おおむね水平に堆積する2、3層の単位を確認することができた。



17. 7－3 調査区の全景（北から）

(4) 7-4 調査区

前方部西側面の墳丘裾部を再確認する目的で設定した。第5次調査の5-1と5-2調査区とのほぼ中間にあたり、現状は水田跡であった。調査の結果、基底石を含む遺存状態の良好な葺石を検出することができ、前方部西側面での墳丘裾を確定することができた。

葺石 墳丘から周壕にかけて広範囲に転落石が堆積していたが、それらを除去すると基底石がほぼ完存し、そこから上約0.9m、高さにして約0.4mほど残存する葺石を検出した。

葺石は、傾斜角度が約22°程度の緩やかな斜面に施されており、基底石はおおむね20cm×30cmほどある大振りの石材を横方向に使用し、それより上部には拳大および両拳大ほどの礫を多用して墳丘に差し込むように小口積みしていた。ここで注目されるのは、葺石内で2本の角杭を確認できたことである。2本の角杭は、約2.4mほど離れていたが、ともに基底石の西端部から0.35m程度東側（内側）にあり、ちょうど葺石の隙間を縫うように打ち込まれていることなどを考慮して、古墳の築造に伴う可能性が強いものと判断した。その性格については、確言できる証拠があるわけではないが、墳丘裾部の構築にあたり盛土を施す際の範囲を示す基準杭ではないかと現状では推察しておきたい。

なお、葺石が途切れた東側では、埴輪片や5cm前後の小礫が散乱した状態で出土していることから、平坦面の存在を想定することができそうである。



18. 葺石検出状況（北東から）



19. 葺石内の角杭検出状況（西から）

(5) 7-5 調査区

古墳の西側に配された周壕の外縁部分を確認する目的で設定した。この地点一帯は、第6次調査の際に電気探査を実施しており、造り出しや墳丘裾のラインと並行しながら北でやや広がる線状の構造が読み取られ、周壕の西限を示すものではないかと考えられていた。

調査の結果、調査区の西端では耕作土の直下で地山面があらわれたが、この地山面は東に向かって一端落ち込んでから平坦に近い面を形成しつつ伸びている状況を確認できた。地山の上面には、おもに長岡京期の遺物を包含する土層が約10~20cmほどの厚さで堆積しており、その層を切り込んで土坑状の遺構が掘り窪められていた。土坑状の遺構は、東西約4m、南北8.7m以上、深さ約1.2mほどの規模がある長楕円形の凹みで、縁部には丸杭が打ち込まれ、瓦器や土師器、陶器、銭貨など中世を中心とする遺物が出土している。

ところで、この底部が平坦に近い落ち込みを周壕と考えることも可能であるが、過去の調査で確認されている周壕内の堆積層は認められず、また緩やかに立ち上がる傾斜面に小礫を敷詰めているという第4次調査(4-1 調査区)で確認された外縁部の状況とは異なるなど、現時点で周壕の外縁部を確定することはできず、今後の調査をまって判断したい。

なお、地山を構成する土層は、緑灰色系ないしは黄灰色系を呈する粘土層や砂層であり、これらは大阪層群であることが判明した。



20. 7-5 調査区の全景(南西から)

(6) 出土遺物

今回の第7次調査では、埴輪や結晶片岩など古墳に関する遺物の他、土師器、須恵器、緑釉陶器、墨書土器、瓦器、陶器、瓦、土馬、銭貨、鉄釘、杭、板材など長岡京期、平安時代、中世、それに近世以降にまで下る各時代、各種類の遺物が整理箱に15箱程度出土している。

埴輪は、7-2調査区からの出土量が最も多く、次いで7-4調査区、7-1調査区の順で少なくなり、他の調査区ではごく少量しか出土しなかった。埴輪には、普通円筒、朝顔形円筒、壺形、蓋形などを確認できたが、そのいずれもが破片資料であって、原位置をとどめたものはもとより、全形がうかがい知れるものも皆無であった。

円筒埴輪は、口縁部片が極めて乏しいのに対して、底部片が目立つ傾向がある。また黒斑の認められるものが多く、底面に棒状による圧痕が残るものなど、第5次調査で確認された埴輪列の埴輪と類似する特徴をもつものが認められた。

長岡京期から中世にかけての遺物は、その大半が7-5調査区から出土したものであり、近世以降の遺物はおもに7-1調査区や7-2調査区で検出した土葬墓に関するものと考えられる遺物である。



21. 出土した埴輪

4 ま と め

以上のように、今回の第7次調査では、恵解山古墳を復元する上でいくつかの貴重な情報を得ることができた。以下では、調査の成果について簡単にまとめておきたい。

1. これまで情報量の乏しかった前方部東側面の一端が明らかになったことである。確認できたのは、上段（3段目）と考えられる墳丘の傾斜面とその下位に連なる平坦面であって、傾斜面には基底石を含む葺石が部分的にはあるが原位置を留めて遺存しており、また高さが3m以上あることも判明した。一方、平坦面については、第5次調査で埴輪列が確認された西側面の平坦面に対応するものであることが明らかになった。幅や埴輪列の有無など、未確認の要素を残しているが、前方部の構造を知る上に重要である。
2. 前方部西側面の裾部を再確認できたことである。この裾部は、これまでの調査成果を加味して判断すると、低くて短い段築を盛土によって形成している可能性が強いと考えられる。これを下段（1段目）と認識するか否かは評価の別れるところであるが、傾斜面に基底石を伴う葺石を完備していること、前方部と造り出しをほぼ全周するように巡らしていることが確実視されることなどから、下段と考えるのが妥当であろう。こう考えた場合、前方部は3段築成とすることができるが、ただしこの段は後円部になると地山を削り出して形成し、しかも葺石を施していない可能性が濃厚と考えられる。
3. また、前方部西側面の裾部で確認できた2本の杭は、古墳に伴うものと判断でき、墳丘を構築する際の基準杭になる可能性が考えられるだけに、注目すべき成果になろう。
4. 今回検出が予測された前方部西側面の埴輪列は、残念ながら平坦面ごと後世に削平を受けて破壊されていたが、盛土の堆積状況を確認することができた。特に、小単位で施された盛土の形態がほとんど崩れず、その範囲を読み取ることができたのは、1単位ずつを丁寧に運搬して積み上げたことを示唆しており、墳丘の構築法を復元する上で新たな知見が得られたことは重要な成果である。
5. 現在後円部には、古くから営まれた勝竜寺区の墓地が存在しているが、前方部においても墓地の存在を確認できたことで、古墳の大部分が墓地として利用されていた可能性が濃厚となった。

報告書抄録

ふりがな	いげのやまこふんだいななじょうさがいほう
書名	恵解山古墳第7次調査概報
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第50冊
編著者名	山本輝雄
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いげのやまこふん 恵解山古墳	ながおかきょうし 長岡京市 しやうりゆうじ 勝竜寺1206-1 他	26209	200	34°54'39"	135°42'2"	20061201 ∩ 20070305	231m ²	保存整備
ながおかきょうあと 長岡京跡			107					
みなみくりづかいせき 南栗ヶ塚遺跡			103					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恵解山古墳 (第7次)	古墳	古墳時代	前方部の斜面と平坦面、葺石、周壕	円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪、結晶片岩	墳丘構築の際の基準杭を検出
長岡京跡 (右京第893次)	都城	江戸時代 長岡京期	土葬墓	土師器、陶磁器、銭貨 土師器、須恵器、墨書土器、軒平瓦、土馬	
南栗ヶ塚遺跡	集落	中世	土坑状遺構	土師器、瓦器、陶器、銭貨	

※緯度、経度の測点は7-1調査区の心で、国土座標の旧座標系を使用。

恵解山古墳第7次調査概報 長岡京市文化財調査報告書 第50冊

平成19(2007)年3月28日 印刷

平成19(2007)年3月31日 発行

編集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1
電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

発行 長岡京市教育委員会
〒617-0851 京都府長岡京市開田一丁目1-1
電話 075-951-2121(代) FAX 075-951-8400

印刷 京都サン企画株式会社
〒600-8073 京都市下京区柳馬場綾小路下ル永原町115
電話 075-351-3423(代) FAX 075-351-3476